

寺地遺跡の巨大木柱遺構とその性格

藤 田 富士夫

はじめに

新潟県糸魚川市（旧・西頸城郡青海町）に史跡・寺地遺跡がある。史跡の指定日は1980（昭和55）年12月5日である。指定理由は「縄文時代中期から晩期にかけての硬玉生産遺跡であるとともに特殊な祭祀遺構」が検出されたことによる¹⁾。

筆者は大学4年生の1970年4月（前期調査）と8月（後期調査）に行われた寺地遺跡第2次発掘調査に参加した。寺村光晴先生（和洋女子大学教授）の誘いによるものであった。この調査では硬玉工房跡として日本で最初の全容発掘となった第1号住居址の検出作業に関わることができた。当時、まだ翡翠（硬玉）とは何かも存分に周知されていなかった時代にあって、八幡一郎（上智大学教授）、青木重孝（新潟県文化財保護審議会委員）、寺村光晴といった翡翠研究を牽引する碩学の、いわば模索期の実践的検討の場に同席することができた。この調査に参加した若い学生たちは、この体験の中で翡翠とは何かを身をもって学んだ。

寺地遺跡の調査は、翌71年の第3次発掘調査、73年の第4次発掘調査へと続いた。第3・4次調査（A地区）は、第2次調査地（B地区）の北に隣接する低位地を対象として行われた。これらの調査に筆者は就職したことによって参加出来なかったが、数度の見学に訪れた。その折に見た縄文晩期（主に御経塚、中屋式期）の配石遺構の様子は今も鮮明な記憶としてある。

かかる配石遺構は、長径16m、短径10mの楕円形を呈しており、積石環状配石Ⅰ・Ⅱ、炉状配石、廊状配石、有柱方形配石、弧状配石の各遺構群から成る²⁾。

中でも、有柱方形配石とされた遺構は「中心部に巨大木柱を4本シンメトリーに配置し、その外側を方形に区画し、各コーナーには大形石棒を直立した状態で配置していた」と要約されている³⁾。

今日、遺跡は「寺地遺跡公園」として整備されB地区に第1号住居址が復原され、第2～7号住居址の位置が表面表示されている。またA地区で検出された巨大木柱が4本、コンクリート柱で復原されている（写真1）（以下、復原4柱とも称す）。ただし現在の巨大木柱の復原位置は原位置ではないように思われる。発掘時のグリッド番号（68～69-T～U）から類推して現在の位置よりは7mほど北北東寄りの場所で検出されたようである。検出地点は都市計画街路の中に位置する。巨大木柱の復原位置についてこのような

事情のあることを考慮しておきたい。

私自身、寺地遺跡についてこのような関りをもったことから、いつも感慨を抱きながら機会を見ては遺跡に立ち寄っている。さる2018年2月26～27日に駒澤大学の瀧音能之先生とご子息の瀧音大氏を糸魚川市と周辺の翡翠遺跡やフォッサマグナミュージアムをご案内する機会があった。その帰路やはりいつものように遺跡に立った。夕陽が沈む直前の茜色に染まった西空はいつみても感動を呼び起こしてくれる。その時に、ひときわ夕景に「勝山」が映えていた。寺地縄文人も同じ光景を見ていたはずである。この時、復原された巨大木柱の方角が勝山を向いているのに気がついて思わず木柱越しに写真を撮った(写真2・3)。太陽は勝山の北麓へ日の入りした。

寺地遺跡の巨大木柱の原位置は失われているが、その方向性は実測図から復元が可能である。巨大木柱は勝山を指していて、それは夕陽の日の入り方向(縄文祭祀性)と関わっているのではないだろうか。このような仮説が浮かんだ。冗長な前言となったが、本稿では寺地遺跡をテーマとして、このことを検証する作業を行ってみたいと思う。

1. 勝山と寺地遺跡

「勝山」は寺地遺跡の南西約3.6 kmに位置し三角錐の頂きを有する威容を成す(第1図)。「親不知・子不知新潟県立自然公園」の東端の子不知海岸に切立って佇立している(写真4)。標高は328.4 mを測る。その際立った姿形を東は約13 km離れた浦本漁港から、西は約21 km離れた越中宮崎漁港からも望むことができ親不知・子不知の象徴的な山稜を成している。

勝山には中世山城が形成されていて上杉景勝築城とも伝えられている。当初は墜(落)水城と称したがのちに勝山城と改称したとする。未発掘であるが郭、井戸跡、堀切、土塁、空堀、石垣といった遺構が見られ、出土遺物に茶筌、磁器、お椀、櫛、竹ペラ、木札、染付片、桶蓋、木鍬がある⁴⁾。

頂上の主郭からは富山湾を眼下に見る。東方向には糸魚川市街への遠望がある。本稿の関心事での寺地遺跡は、地点の特定はやや困難ではあるが市街路は視認できる。なお期待薄ながらも主郭一帯の踏査を念を入れて行い“縄文遺物”の採集を試みたが成果はなかった。

かかる勝山と寺地遺跡との関りは、改めて見ると絶妙な位置取りにあることに気づかせられる。縄文中期のB地区第1号住居址辺りからは、その頂上が剣点として視認できる(写真5)。一方、縄文晩期A地区配石遺構群の辺り(現在の道路中心域)からは頂上の三角形がはっきりと視認できる(写真6)。遺跡から100 mほど勝山へ歩みを進めると勝山は手前の山稜にさえぎられて見えなくなる。A地区配石遺構群の場所は勝山を正面に見据える位置にある。それも接近できるギリギリの場所ということになる。

2. 有柱方形配石遺構に関する所説

有柱方形配石遺構について、主に4本の杉材を用いた巨大木柱から語られている。次に管見にある諸論を見ておこう。

調査主任の寺村光晴氏の要約をひけば、「最も注目すべきは、この方形配石の中央部に、木柱が相互に約九〇センチの間隔で四本シンメトリイに直立していたことである。木柱の径はいずれも六〇センチ前後である。木柱は樹皮を除去し、根元に抉りがまわっている。根元に抉りをもつ木柱は配石遺構外からも数本出土している。また、本来配石の東南外側に高さ五〇センチ前後の二個の立石があり、立石を基点として外側に向かい八字状に出入口様の配石が認められた。配石内からは独鈷石、朱漆塗櫛数個が出土している」とする。

寺村氏は、ここに4本柱といった特徴から長野県諏訪市の諏訪大社の御柱を想起する。御柱に見られる曳行のための抉りなどの共通性から、「(寺地遺跡の)四本の柱は大きさ、形態、配置の状態等からしても諏訪大社の御柱に対比され、神の依代としての意義を強く感得するものがある。換言すれば、寺地遺跡の四本柱は、諏訪大社の四本の御柱の初現と同意義を有すものであろう」と説いている⁵⁾。

関雅之氏は「共同体のトーテムまたは祖霊(祖先神)の宿り祭るところ」、「大形石棒の配置と有柱方形配石はきわめて関連深いもので、この南東グループの配石遺構は生や性をめぐる地母神的信仰の場ではなかったろうか」としている。なお、関連して紹介するが隣接して「環状木柱列遺構」が発掘されており、これに関して石川県の真脇遺跡や新保本チカモリ遺跡の環状木柱遺構と対比して、「(金沢市の)チカモリ遺跡では正円形木柱列群に近接して土坑群が存在し、寺地遺跡の場合も組石墓および積石環状配石(墓)が近接していることから、葬送祭祀儀礼と深い関連を有する遺構と考えられる」とする見解を呈している⁶⁾。

民俗学者の青木重孝氏は四柱配石(有柱方形配石)を喪屋とし、南設する弧状配石Ⅱは、集落の人々が集まって喪葬をするところと説いている⁷⁾。

石川日出志氏は、寺地遺跡の「炉状配石」について、内部に穿たれたピット内から大量の焼人骨が検出されている事から、それを縄文晩期の再葬に関連する施設と想定した。寺地遺跡の配石遺構群は、この遺構を中心としたそれぞれの機能、役割を担っていると、配石遺構の構成復原案を提出している(第2図)。「東側のA～Cが平石を敷きつめて敷石住居を思わせる床面を構築し、Bでは方形に配置した木柱を立てているのに対して、西側のD・Eは立体的な積石となっていて、左右でその構造は好対照をなしている。西側のD・Eが墳墓を思わせる構造なのに対して、東側のA～Cは何らかの儀式的執行を思わせる」と、各配石遺構の性格を読み解いている⁸⁾。

なお、私は4本柱の芯々間が140cmの規格を有していることから、その構築に際して

35 cmの縄文尺×4単位が用いられた可能性を説いたことがある。縄文尺の適用は、本遺構が集団間での共同作業で構築されたことを示すと解している⁹⁾。

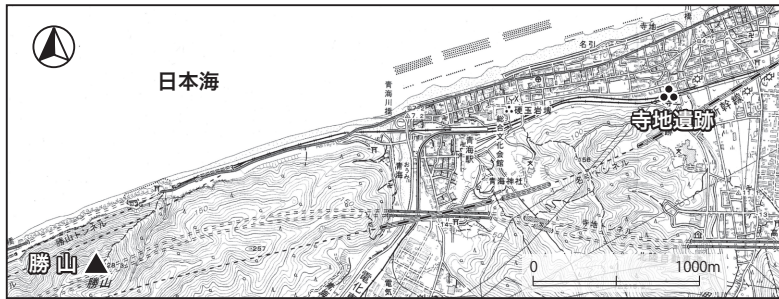
3. 4本柱遺構と勝山と日の入りの観測

次に有柱方形配石遺構の4本柱遺構と勝山の関連を現地観測から検討したい。今日、遺跡を貫いて東西に市道が走っている。有柱方形配石遺構は市道下になっているので、その原位置を正確に確定することは困難であるし、また復原4柱も原位置を恐らくは7 mほど移動していると思われる。従って、寺地遺跡と勝山とを結ぶ観測の企ては厳密に言えば擬定的にならざるを得ないが、原位置が失われているのと調査当時かかる視点での意識がなかったことからやむを得ない。かかる条件制約の基での観測であることを了知いただきたい。

なお観測ではできるだけ原位置からの視点を意識した。その体験から感じた事だが、遺跡と勝山との距離が程よくあり、当然の事だが太陽が直線光射の性格を有していることによって現地観測において大きな支障はなかったと思っている。

これもまた当然の事であるが太陽は東から昇り西へと沈む。小林達雄氏の研究牽引によって縄文時代の二至二分の太陽運行と主要遺跡のランドスケープとの関係性が随分と明らかになっている。それには日の出、日の入りの山容をメルクマークとするもの、あるいは立柱をそれとするものなどが指摘されている¹⁰⁾。寺地遺跡では、勝山への日の入りと、立柱との関連性を見ようとするものである。

寺地遺跡の南西約3.6 kmに勝山が位置する。遺跡から見た夕景は極めてよく映えている。4本柱遺構の東西軸は正面に勝山を指している(南73.12度西)。4本柱を通して、勝山へ太陽が沈む日の入りは何らかの意味を有しているものと見当をつけてみた。「はじめに」記したように最初に寺地遺跡でのランドスケープが日の入りにあるのではないかと、意識したのが2018年2月27日の夕刻であった。この時、太陽は北西寄りの麓(日本海)に沈みこんでいった。この1か月弱後の3月21日は春分なので真西に沈む。すると勝山の頂きを目指して次に日の入りするのはおおよそ2018年10月21日～24日頃と見当をつけてタイミングを見計った。10月21日に最初の現地観測を行い16時38～40分に日の入りを確認した。この時点での太陽は勝山の頂きにかかりつつ、やや北側に日の入りした(写真7・8)。22日は用務で動きがとれず、23日は雨天で観測不可であった。再度現地におもむいたのは10月24日であった。この日は好天に恵まれ、勝山のやや左肩(南側)に16時33分頃に太陽が球体を成して沈むのが観測できた。それは復原4柱(写真9)や想定原位置(写真10)でもほぼ同位置への日の入りが認められた。前者への日の入り時間がやや早いのは、勝山との距離感などが関係していよう。



第1図 寺地遺跡と勝山の位置図



写真1 寺地遺跡公園（北東から）



写真2 復原4柱から見た勝山の日の入り
(2018年2月27日、17:16)



写真3 A地区から見た勝山の日の入り
(2018年2月27日、17:17)



写真4 勝山の威容（須沢臨海公園から）



写真5 B地区から見た勝山



写真6 A地区から見た勝山



写真7 復原4柱から見た日の入り
(10月21日、16:38)



写真8 A地区から見た日の入り
(10月21日、16:40)



写真9 復原4柱から見た日の入り
(10月24日、16:32)



写真10 A地区から見た日の入り
(10月24日、16:33)



写真11 A地区・松山城址への日の入り
(2019年1月12日、15:27)



写真12 A地区から見た勝山と日の入り
(2018年3月14日、17:21)



写真13 A地区・木柱模型から見た勝山

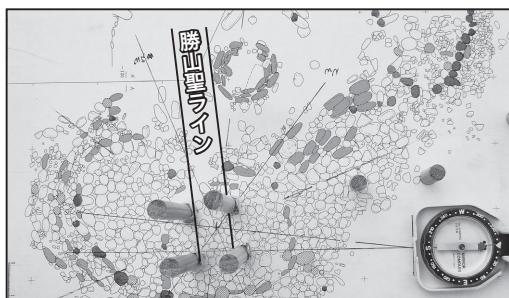


写真14 A地区配石遺構木柱と勝山聖ライン

ここにおいて、4本柱遺構と勝山そして太陽の日の入りが深く関わっているのが確認できた。10月21日と24日の観測はいずれも遅進のタイミングであった。この中間の22日あるいは23日に勝山の頂部への日の入りがあったのである。観測地と勝山の距離が短いことによって、当地での太陽の移動はダイナミックである。日の入りは南天から西へと斜行するので、勝山の頂上に架かるのは10月22日と予想できる。この日に寺地遺跡の4本柱遺構の中軸線と勝山の頂を結ぶ、日の入りラインが出現するはずである。

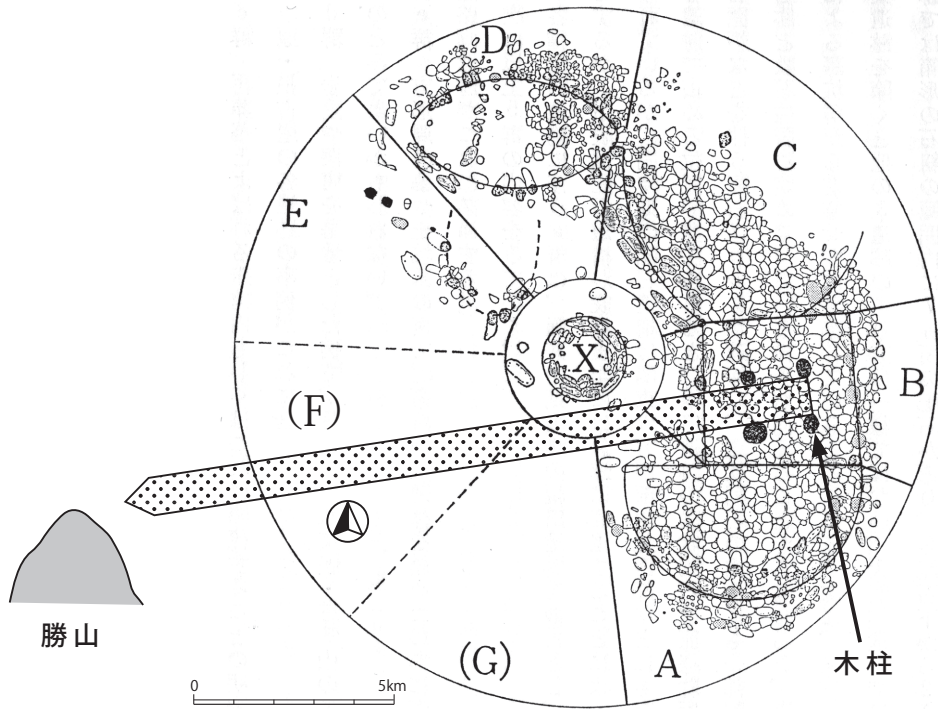
4. 縄文暦法と関わる4本柱遺構

寺地遺跡から見た勝山の頂きへの日の入りは10月22日の夕刻と見当がついた。4本柱遺構は、そのラインを人為的に確定するための装置すなわち記念物として構築されたとするのが私案である。記念物に巨大な柱材が用いられたのは、“無文字民族の間では、多くの人が労力と時間をかけてつくったものほど高い価値があり、呪性も優れている”とされることによるであろう。

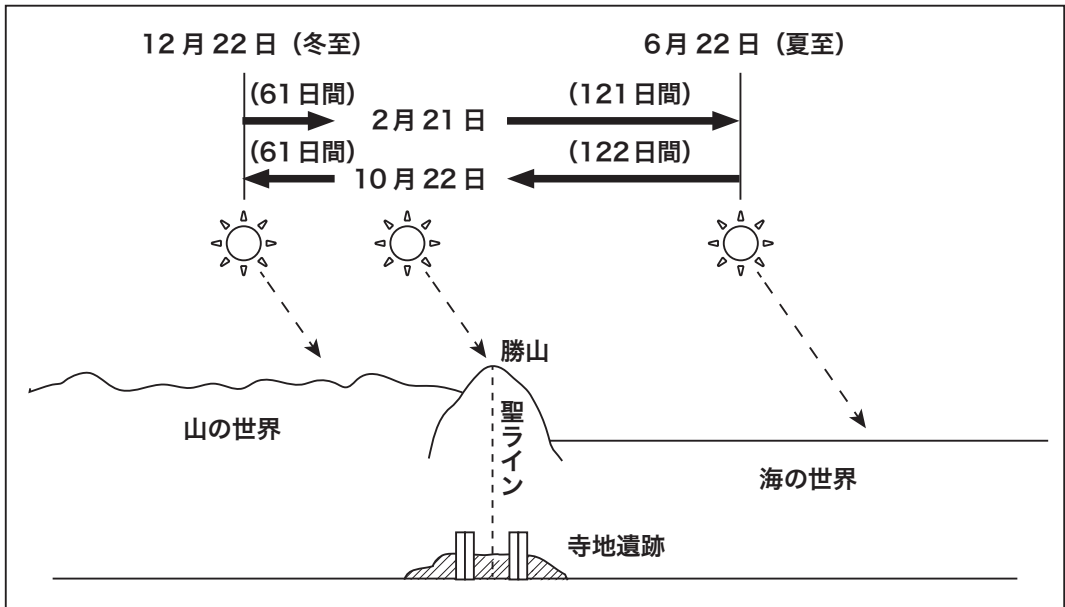
さて日の入り位置はその後、勝山から遠ざかり12月22日の冬至を迎える。冬至には南西方向のナビキ山（標高約180m）の山稜へと太陽が沈む。この日を境に、太陽の日の入り方向は再び勝山へと向かう。その途上の2019年1月12日に現地観測を行った。日射しは弱い、ナビキ山稜に営まれた松山城址へと日の入り認められた（写真11）。計算では次に勝山の頂への日の入りが見られるのは2019年2月21日となる。この間、10月22日～冬至まで61日間、冬至から2月21日までが61日間で、合計122日間の周期となる（a）。この周期は太陽暦365日の3分の1となる。

やや冗長となるが、ここで2月21日以降の日の入りを計算してみたい。日の入りは日一日と勝山から離れて西方海域に移動する。この途上にあるのが写真2であり、2018年3月14日の観測である（写真12）。これらを経て2019年6月22日（夏至）には最西端に到達する。この間121日である（b）。そして、夏至から再び勝山方向へと日の入り位置が移動し、勝山頂上へは10月22日に沈むことが想定できる。この間122日である（c）。この周期は太陽暦365日の3分の1×2季相当（b・c）となる（第3図）。

寺地縄文人による勝山への日の入り位置の観測は、正しく「三季」を区分するカレンダーとしての意義をもっていたと思われる¹¹⁾。私は、かかる勝山への日の入り位置を「定位化」とするとともに勝山への聖性を顕示する装置・施設として4本柱遺構が設置されたとみている。言を重ねるが、勝山と4本柱遺構は縄文暦法と深く関わっていると推考するものである。



第2図 寺地遺跡A地区配石遺構の構成復元案 (石川註8より引用)
 一網目は勝山(聖)ライン(藤田加筆)



第3図 寺地遺跡と勝山(指標)への日の入りから想定される太陽運行

5. 寺地縄文人の季節観

次に寺地縄文人の季節観を探ってみたい。「勝山」を境として、南方は奥深い山稜域を成す。一方、北方には富山湾が広がる。勝山は山域と海域とを隔て、そして結ぶ聖なる山であったとできよう。寺地遺跡での日の入りの観測によって、10月22日～翌年2月21日までは「山の世界」「冬の世界」、2月22日から10月21日までは「海の世界」「春・秋の世界」といった季節感や生活スタイルを二大別する指標であったともいえよう。さらに「海の世界」は夏至（2019年6月22日＝日没の方向の折り返し日）を挟んで二分できる。すなわち全三シーズン制、これが寺地縄文人の時間観念であったと思われる。それぞれの鍵点としての「山の世界」では冬支度や狩り、「海の世界」では収穫や生産活動が主体的に実施されたものと思われる¹²⁾。

ここで富山市の北代遺跡の三角壙形土製品に触れておきたい。かつて富山県埋蔵文化財センターの早川コレクション中の2点を考察したことがある。当該遺物では、すべての器体面（5面）に刺突文すなわち列点が付されている。その列点を「縄文数字」と仮定して、その個数を数えると1点の三角壙形土製品の総個数は「118」で完結し、もう1点は器面の組み合わせで「118」が2度出現した。「118」は太陰暦の1年間＝354日の3分の1（4か月相当分・4朔望月）を正しく示している。もし、これが季節単位を示すものとするれば縄文人は季節を春・秋・冬の3シーズン制で捉えていた可能性を類推したことがある¹³⁾。

寺地遺跡の季節観そして北代遺跡の「縄文数字」の在り様から、縄文カレンダーは三シーズン制であった可能性を考えている。ここで若干の問題点を自問しておきたい。それは寺地遺跡の日の入りの観測では太陽暦を、北代遺跡の「縄文数字」では太陰暦を基準としていることについてである。私は縄文人は太陰暦法を獲得していた可能性が高いと述べたことがある¹⁴⁾。

この点から、もう少し考えてみたい。前節で (a) が122日間、(b) が121日間、(c) が122日間であると述べた。太陰暦の基本は「朔望月に基づいて1カ月を29日（小の月）または30日（大の月）とし、1カ年を12カ月とする」ものであり、1カ月は29.5太陽日となる。 $(a \cdot c) 122 \text{ 日} \div 29.5 = 4.135$ 朔望月となる。すなわち4か月と4日となる。(b) $121 \text{ 日} \div 29.5 = 4.101$ 朔望月となる。すなわち4か月と5日となる。暦法知識が確立された今日にあって、太陽暦では4年に1度、太陰暦では5年に2度の閏月を設けて実際の季節感とのズレを調整しているのは周知のところである。

けだし、本事例について太陽暦と太陰暦の算法の違いは左程問題ではないと思っている。なんとすれば寺地縄文人にとって定位装置としての4本柱遺構と勝山とを結ぶ日の入りの勝山ライン、すなわち聖なるラインが不変の季節感を保証してくれているからである。あるいは、縄文人がすでに「太陰太陽暦」的暦法の視点を獲得していた可能性があると思われる。

おわりに

私はこれまで縄文人と太陽運行に関して二至二分の方角に留意してきた¹⁵⁾。しかし、今般寺地遺跡の事例を検討し、それに捉われない縄文人の時間観念があるのを知り得た。ここに縄文人の思惟が一面的でないことを知らされた。応用編で北陸の環状木柱遺構の性格について、いくらかの見通しが見えてきた。これはいずれ発表の段階が来るものと思っている。

さて、寺地遺跡と勝山と太陽の日の入り位置は深い関係で結ばれていた。有柱方形配石遺構の4本柱遺構は、季節の推移を告げる聖なる勝山を奉祭するための施設としての意義が大きいと推考する。それは同時に勝山への日の入りの位置をブレることなく観測する定地性の装置でもあっただろう。勝山は、太陽の運行を正確に示す指標であり、寺地縄文人の日常の生活サイクルの基準となっていたと思われる。

なお、私は配石遺構群の実測図の4本柱遺構に模擬的に柱に見立てた立体模型を作成して、現地でのランドスケープ確認の補助とした(写真13)。方位を合わせて勝山を4本柱の中軸線上で見やった時に、そのライン上には配石遺構が見られずかつ礫石もまばらな事に気がついた。また、このラインを避けるように再埋葬である「炉状配石」が構築されている(写真14)。石川日出志氏が「西側のD・Eが墳墓を思わせる構造なのに対して、東側のA～Cは何らかの儀式的執行を思わせる」と指摘しているのに従えば、4本柱の軸線の北域に「炉状配石」や墳墓が集中しているのである。私考では「海の世界」「春・秋の世界」域に属する。一方、軸線の南域に「儀式」の場が存在しており、そこは「山の世界」「冬の世界」域に属するようである。寺地遺跡の配石遺構群は、今後かかる二項対立の視点からも考察されて良いと思っている。勝山を正面に見据える寺地遺跡と、そのランドスケープは縄文時代の世界観や他界観を探るうえで重要であると確信している。

本稿では、考古学研究ではあまり対象とされない形而上の課題を取り上げた。必然的に冒険的な内容となり我田引水的な記述も多いものになったと思われる。これらについて識者のご批判を頂ければ幸いである。

追記 脱稿後の2019年2月21日に現地観測を行い、臣大木柱遺構と勝山とを結ぶラインに17:04に日の入りすることを確認した。

註

- 1) 戸根与八郎「寺地遺跡」『図説 日本の史跡1 原始1』同朋舎 1991年, 119頁。
- 2) 関雅之「第2章 A地区の調査—配石遺構と木柱群—」『史跡寺地遺跡』新潟県青海町 1987年, 29～38頁。同「第2章 配石遺構と木柱群の考察」『史跡寺地遺跡』新潟県青海町 1987年, 311～320頁。
- 3) 寺村光晴・青木重孝・関雅之「結語 3 配石遺構と木柱群」『史跡寺地遺跡』新潟県青海町 1987年, 483頁。
- 4) 植木宏「勝山城」『日本城郭大系7 新潟・富山・石川』新人物往来社 1980年, 197～199頁。糸魚川市役所青海事務所編「上杉景勝と豊臣秀吉が会見した越後・越中国境の要害の城『勝山城(落水城)』」(パンフレット1～4頁) 2018年12月資料。
- 5) 寺村光晴「新潟県寺地硬玉遺跡」『月刊文化財』第121号 第一法規出版株式会社 1973年, 38～47頁。
- 6) 関雅之「第2章 配石遺構と木柱群の考察」『史跡寺地遺跡』新潟県青海町 1987年, 315～316・320頁。
- 7) 青木重孝「第7章 民俗学よりみた寺地遺跡」『史跡寺地遺跡』新潟県青海町 1987年, 478頁。
- 8) 石川日出志「縄文・弥生時代の焼人骨」『駿台史学』第74号 駿台史学会 1988年, 102～103頁。
- 9) 藤田富士夫「雪国の大型建築に三十五センチの『物差し』」『アサヒグラフ臨時増刊 三内丸山遺跡』通巻3780号 朝日新聞社 1994年, 73頁。藤田富士夫『縄文再発見』大巧社 1998年, 22頁。
- 10) 小林達雄「総論 縄文ランドスケープ」『縄文ランドスケープ』アム・プロモーション 2005年, 1～19頁。
- 11) ここは四季とするのが一般的であるが、私は縄文人の季節観は三季制であった可能性を想定しており、意図的に三季と表現した。
- 12) 小林達雄氏は、春夏秋冬の四季の変化によって動植物資源の種類と量も変化するとの視点から「縄文カレンダー」を提唱し、「縄文時代は、食料獲得をはじめとしたすべての行動を自然の移り変わりに重ね合わせて計画的に進行させていたのである」とする。(『縄文人の世界』朝日新聞社 1996年, 108～112頁)。先見的な視点である。私考が認められるとすれば、「四季の変化」を「三季の変化」に組み替えできないかとするものである。
- 13) 藤田富士夫「早川コレクションの太陰暦『縄文数字』を記した三角壱形土製品について」『大境』第36号 富山考古学会 2017年, 5～16頁。当該稿では今日の「夏季」を春季と秋季に分け入れる想定をしている。
- 14) 藤田富士夫「(4) 縄文時代の太陰暦『数字』を有する遺物について」『(一社)日本考古学協会 第83回総会 研究発表要旨』(一社)日本考古学協会 2017年, 24～25頁。
- 15) 藤田富士夫『縄文再発見』大巧社 1998年, 8～18頁。